

2004/12/18 COE主催国際セミナー報告（駒場10号館3階会議室、13:00~17:00）

アジアから見る空間移動表現のタイポロジー「タイ・台湾・中国陝西」

この研究会の目標は、類型的特徴をかなり共有しているタイ語と、漢語系の二種の地域語：台湾語（学術名台湾閩南語）と西安語（陝西省で話されている地域語、学術名関中方言）の対照によって、アジアから、いま注目をあつめている「空間移動の言語表現のタイポロジー」研究に貢献をすることであった。

そのため、言語学の若手研究者でありながら、それぞれのネイティブスピーカでもある三人の講師に、自分の言語が空間移動事象をどう言語化するかを整理してもらい、その紹介・分析をお願いした。司会とまとめ役は本COEのラマールが努めた。会場にタイ語・ベトナム語・漢語系の言語の専門家と、それらの言語になじみのない言語学研究者が集まりまして、それぞれの発表に対してなかみの濃い議論ができた。三人の発表者と発表タイトルは以下の通り：

- ・「台湾語の空間移動表現」

陳 順益（獨協大学 [非]、言語情報科学専攻卒、博士）

- ・「タイ語の空間移動表現と類型論的な位置付け」

Ruetaivan, KESSAKUL（21世紀COE「心とことば」ポストドック研究員）

- ・「The encoding of motion events in the Guanzhong dialect」

唐正大 TANG Zhengda（中国社会科学院語言研究所・院、本COE招聘若手研究者）
それぞれの言語について、Talmyの提示した枠組みを参考にし、対照に有効なパラメータを探りながら発表が行われた。

なお従来のタイポロジーをめぐる議論では、「中国語」について言われることは常に標準語のみを考慮されるが、今回の研究会の一つのねらいは、台湾を含むアジア大陸内部の異同を明らかにするとともに、漢語系諸語の内部の多様性を洗い出すことでもあった。研究発表の対象となった三言語の話される地域を見ると、相関距離は約1350 km（台湾～西安）×2200 km（西安～バンコク、バンコク～台湾）という三角形の角にあるとみとれる。共通語は北京語を基礎としているとされるが、実際はみんなが参考とする「普通話」は書きことばとして保守的な言い回しも保持したり、各地の言い回しを許容する「コイナー」の色も濃く、必ずしも位置する地域（北京）の代表とならない。

ラマールが最後のまとめの時、標準中国語のデータを取り入れて、紹介された地域語（中国大陸のそれぞれ東南と西北で話されることば）との相違点も整理した。その結果、見えてきたことがいくつかある。

1) タイ語、台湾語、関中方言、中国標準語の共通点

タイ語と漢語系の三言語は、ともに声調言語・SVO言語で孤立語である。今回の研究発表で、タイ語と漢語系3言語は、移動事象を表すのに、経路動詞（Path Verb）と「様態動詞＋経路動詞」の組み合わせた動詞句という二つの異なる言語手段を用いることが確認でき

た。後者は Talmy のいう **Satellite-framed language** 的な言語手段とみなすべきかどうかという問題も議論された。しかもどちらの言語でも、移動物が外界の力が加えられて位置変化を起こす「使役移動」(caused motion) 事象の場合、「下ろす」や「出す」のような経路動詞が使えず、必ず移動の原因を表す動詞 (co-event verb) を表示し、経路動詞をその次に位置させるという制約が見られた。このように、移動事象のタイプによって用いる言語手段が違うという点において、日本語やスペイン語のような典型的な動詞枠付け言語 (verb-framed language) とは異なる。

2) タイ語 vs. 漢語系諸語：タイ語と漢語系諸語が根本的に異なる点

- ・場所詞の位置：漢語系諸語は前置詞句を動詞の前に置くが、場所が移動の着点を現す場合は動詞後に置く。それに対してタイ語は場所詞を動詞の後ろにしか置けない。

- ・移動物を表す名詞が動作の対象で同定できる場合、漢語系諸語は主題化したり「把」などを用いたり動詞の前に置くが、タイ語はそれができない。

以上の2点は、タイ語が徹底的な VO 言語であることを思い起こせば納得いく。一方、漢語系諸語は「動詞後」と「動詞前」という位置と場所詞と異同の意味関係(着点か起点かなど)を関連づけている点はタイ語と大きく異なる。

3) 南北差：タイ語と台湾語が、官話 (Mandarin) 系の関中方言と共通語と対立する点

- ・中国の共通語では、直示移動動詞「来る」「行く」は「来東京」(東京に来る)のように場所詞を目的語としてとるが、ほかの動詞に付いて動作の直示方向を表す場合、場所詞を直示移動動詞の後ろに置けない。それに対して、タイ語と台湾語では、「様態動詞 (+非直示動詞) +直示動詞」の後に移動の着点を置くことができる(「走る+帰る+来る+家」)。

- ・移動物が目的語である場合、台湾語とタイ語では「動詞1+移動物+経路動詞」という語順が多いのに対して、関中方言ではその語順が不可能で、共通語の代表とされる北京語でもそれは頻度が低い(「追う+犬+出る+行く」[犬を追い出す、話し手から離れる])。

4) 関中方言 vs. 中国共通語とタイ語

官話系の中国語では、経路動詞が場所目的語をとる：「渡る+橋」、「出る+門」。共通語では経路動詞が移動様態などを表す動詞につく場合でも「走る+渡る+橋」のように言えるが、関中方言は「走る+渡る+橋」、「走る+出る+部屋」というような「様態動詞+経路動詞+場所」を受け付けない。ほかの動詞の後に置かれる経路動詞(出る、あがる、入る、わたる、帰るなど)は場所目的語がとれないということである。

- ・それと関連し、関中方言では場所詞を動詞の後ろに現れるときは移動の着点を表すときに限る。それを導入するのは「着く」を意味する動詞に由来する形式である。移動の起点や経路を表す場所名詞は動詞に前置される前置詞句で表示するしかない。タイ語や中国共通語では、「移動様態+経路動詞+場所」、「移動原因+経路動詞+場所」という構文が成立する。

- ・中国語共通語において、経路動詞が起点(出る、降りる)や経路(上がる、降りる、渡る)をもとるので、この構文でのみ動詞の後ろに(つまり、着点の典型的な位置)起点や

経路を置くことが許され、この構文の形（結果構文）と意味が矛盾する。逆に關中方言ではそれが成立しないのは、結果構文の意味と形がより高い対応関係を示すことを意味する。

以上の点から見ると、かつて橋本万太郎氏が提示した「言語類型地理論」を思い起こす方もいるだろう。次回は、タイ語やベトナム語の視点から漢語系諸語を見直す作業にかかりたい。